

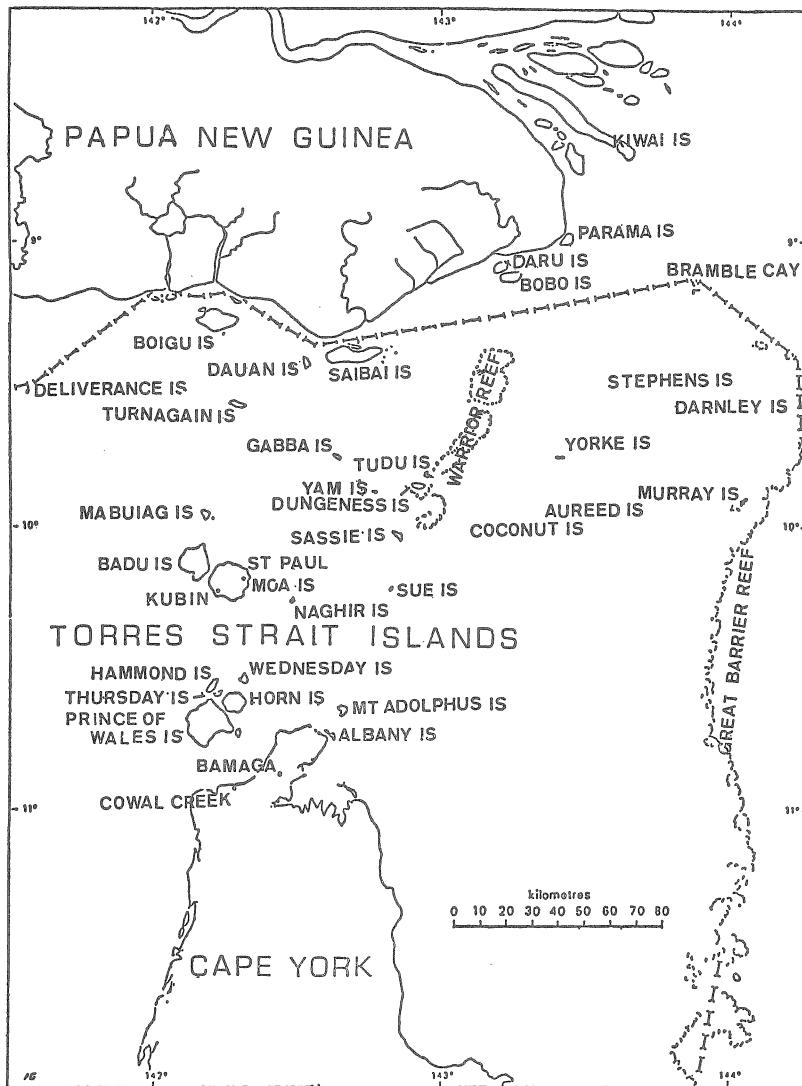
# パプア南西岸パラマ島の 人口変動と文化変容

大 島 裹 二

は し が き

1974年以来、6年間に5回（1974年は通商産業省海洋文化調査メラネシア班、1975、77、79年は文部省海外科研の西南太平洋島嶼部漁撈民調査、1976年は関西学院大学からの短期留学期間中の調査）の現地調査を行ったトレス海峡（Torres Strait）で、オーストラリア、クインズランド州に属する海峡内の諸島とパプア・ニューギニア、西部州のキワイ（Kiwi）地区の沿岸諸村との間に、多くの交流のあることに気づいた。とくにトレス海峡の中での筆者の主要調査地、ヨーク島（Yorke Is.）で1952年以来、来住定着したパプア系3家族の出身地が、キワイ地区のパラマ島（Parama Is.）であること、あるいは1977年の異常人口増が同じくパラマ島からの不法な一時居留者によるものであったことから、ヨーク島との関連でパラマ島へも実地調査の足を伸ばす必要を感じていた。1977年にパプア・ニューギニア、西部州の州都ダルー（Daru）を調査したとき、役場の書庫から独立前の古い書類を引っぱり出して州内各村の資料を筆写したときもパラマ島のものを中心に蒐集したし、また、ダルー島内のコナ（Kona、英語の corner のピジン化したもの）と呼ばれる地区の出身地別の居住集団でもパラマ島出身者の住むパラマ・コナで聞きとりを重ねた。

これらの予備的調査の段階で、筆者は一つの予見を持つに至った。それは、パプア南岸キワイ地区の海岸が、西部州を貫流する大河フライ川（Fly R.）の大量の流出土砂で常に黄色く濁っている中で、パラマ島だけは、トレス海峡諸島と同



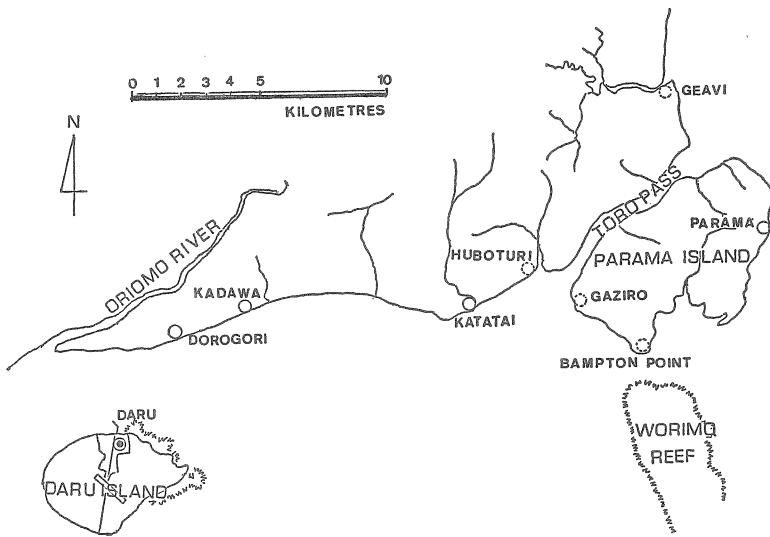
第1図 トレス海峡

じく青い海に面しているだろうということである。それは、極めて単純な発想ではあるが、黄色い海に育った人は海に潜ることをしないだろう、パラマから来た人が潜水作業に従事できるということは、きっとパラマが青い海に面しているからだ、という予測である。

1979年の調査で、畠道也氏（関西学院大）の音楽調査に同行する形で、念願のパラマ入りを果たし、島の北と西はフライ川の影響を受けた黄色い海であるが、東と南にさんご礁を伴う青い海が拡がることを確認した。パラマ教会の改築8周年記念の徹夜のシン・シン（部族の踊りの大会）に招待されただけの丸1日にも足らない滞島ではあったが、この短時間の現地調査で集落図を作成し、村に居住する全世帯を調べていくつかの聞きとりをすることもできたのはなによりの幸いであった。事前に入手し、整理・分析しておいた資料と、この短時間の現地での見聞を合せて以下の論考でパラマ島の変容をたどることにしよう。

## I パラマ島の集落

パラマ島はパプア・ニューギニア共和国西部州に属する島である。フライ川の河口部にはその堆積作用が生んだ多くの低平な島嶼群があるが、この河口部島嶼群からやや離れて、むしろフライ川の直接の流路からすこし外れたところに位置する島で、幅500mのトロ水道（Toro Pass）を隔ててパプア本土、西部州の南東角に相対している。地図上では面積40km<sup>2</sup>をもつが、島全体が密生するマングローブ林に覆われて水陸界も確認し難いほどで、オーストラリア地図局が測量した10万分の1地形図でも島の輪郭は実線ではなく破線で描かれていた。島内にはいたるところ複雑に水流が入り組んでいて、集落はおろか、農地を開くことのできる乾燥地もほとんどなく、沿岸にある2～3の砂浜部分が辛うじて人間に生活の場を与えているが、これらの可住地、可耕地を繋ぐ道路すら開き得ない。パラマ村は島の東岸にあり、砂浜に続く低い砂丘の後方に、現在は30戸たらずの高床式住居群を形成しており、あと、西岸のトロ水道に面してガジロ（Gaziro）という仮



第2図 パラマ島付近概念図 (○集落, ○仮小屋または廃村)

小屋の集落、南端のバンプトン岬 (Bampton Point) 付近に古い一時的居住地の形跡があるだけである。これらの仮小屋とか一時的居住地というのも、出作りによる農作業をしながら、同時に沿岸での漁撈活動、古くはこの島の名を有名にしたワニの狩猟のための基地としての性格を有していたものであったと思われる。なお、パラマ島の対岸、やや西方のカタタイ (Katatai) 村を調査した共同調査者の橋本征治氏 (関西大) の聞きとりによれば、カタタイ村民の父祖はパラマ本村からガジロ (あるいはバンプトン岬) に分村を作っていた人たちであって、パラマ村とカタタイ村とは血の繋がりからいえば、いわば「同じ村」という概念にあったものだという。

ところで、現在のパラマ村は、前述のとおり、東岸のやや広い砂浜の奥に続く砂丘上に立地しているが、この砂浜部分は僅々 20 年余の間にも徐々に拡がりつつあり、「人口が減るのに村の方は広くなる」と村民がその皮肉な現象に苦笑するほどであるが、彼らが指でさし示す昔の海岸線部分を考えると、幅は僅か 50 m 余の

細長い砂浜にこの村があったわけで、以後拡大した砂丘部分は、サツマイモ、メロン、カボチャ、マメ類等の園芸的な農業をする農地として利用されている。ここに南北に走る1本の道路を挟んで250mの間に、大小不揃いの高床式住居が並ぶが、コンクリート建築はL.M.S.（ロンドン宣教協会）の後を継いだ合同教会派（United Church）の教会だけで、他はいわゆる bush material を用いたもの、つまり木造でパンダナスの葉で葺いた家が大部分であるが、ごく最近、トタンを使って屋根や側壁を改裝したものが2戸あり、そのうちの1戸は診療所（Medical Aid Post）である。小学校は、一時廃止されていて、全島の小学生が寄留してダルーの学校に通わなければならなかったのを、全島民の意志表明が受け入れられてやっと1978年に再開された。これは集落の北150m、この島には珍しい緑の草地の一角に、島民総がかりで建てた土間式、パンダナス葺き屋根の小綺麗なものである。

島には小さな店が1軒あり、「お早う商会（Good Morning Trading）」と名乗っているがライセンスを持っていないのでアルコール類の販売はできない。物品は自前でダルーに仕入れに行っているのだが、一般の島民も適宜ダルーには往復して必要なものを入手しているので、とくにこの店の商業活動が活発というわけではない。むしろこの店では、時に島民が近海で漁獲して来たバラマンディ（barramandi、スズキに似た魚）を「ダルー水産会社（Daru Sea Foods Co.）」に取次いだり、この島では得られないサゴヤシ（sago）の樹幹から得るサゴを、北部のフライ川地区の人々がカヌーで持つて来るのを預かって島民に売るといったことで重宝がられている。

さて、このパラマ村の状況で最も特筆すべきことは集落内で各クランごとの「住み分け」がいまでも守られていることである。外来者の眼には、各区域の境界を示すもの（たとえば特定のココヤシの木であったりアーモンドであったり、遠方の大木の見通しの線だったりするらしい）がはっきり判別できないが、村民ははっきり区画を知っており、北から、ドリオム（Doriomu、サメ）、マルアダイ（Maru-adai、ヒクイドリ）、ヘゲレダイ（Hegeredai、ヤマイヌ）、オロモルビ（Oromo-

rubi, イヌ), ミアリダイ (Miaridai, ワニ), ガイダイ (Gaidai, ワシ) の六つの地区となっている。この区画は集落の東の低い砂丘部分の農地はもとより、そのまま東に延長して砂浜から遠浅の海面にまで及んでいて、村民の所有するディンギー (dinghi, ジュラルミン製のボート) やカヌーは、それぞれ自分の所属するクランの海浜に揚げるかその沖に錨を下しているが、外部の者がこの村を訪ねて来るときも、訪問相手のクランの海浜から上陸しなければならないことになっており、この例外が認められるのは政府巡航船と病人用の救急艇だけだという。

しかし、このクランの土地区画は内陸側には及んでいない。つまり、集落のすぐ西にはマングローブの密林が迫っており、歩いて入ることもできないし、かといってカヌーを入れるような水面でもない。これは人々にとって、利用価値のない非生活空間である。つまり、クランの土地区画は利用価値のある海面の側には延びても、利用できないマングローブ林には及ばないのである。その点、A. C. Haddon のケンブリッジ調査隊が調査報告したトレス海峡諸島内のマリー島 (Murray Is.) の例、あるいはわれわれの共同調査者島田正彦氏 (福井大)・瀬川真平氏 (関西学院大研究員) のダーンリィ島 (Darnley Is.) の例、松本博之氏 (愛媛大) のマビオグ島 (Mabuiag Is.) の例では島の内部も山の斜面上までクランの領域に分割されていて対照的である。

なお、クランごとの土地区画については後に再度詳述するが、前述の教会はマルアダイの土地に、診療所はミアリダイの土地にあり、小学校は集落を外れているのでどのクランにも属さない土地だった。

## II パラマ島の人口の変遷

この調査の基礎的資料としたものは、ダルーのキワイ地区役場 (Kiwai District Council) に保存されていた1949～1964年の「村帳 (Village Register Note)」と、1966, 71年の「徴税票 (Tax Census Sheet)」、それにわれわれの現地調査の前年1978年のセンサスのためにその12月11日に調査官が行った「現況調査 (Village Survey)

個票」であり、補助的には1977年9月2～9日ダルーの第1～第3パラマ・コナ(Parama Kona No. 1～No. 3)で行った聞きとり調査と、1979年9月1～2日のパラマ島現地調査で得たものを加えた。ただし1966年以前のものは統計処理上不明確な点が多く、その数値は必ずしも全面的に信頼するわけにはいかない。

「村帳」というのは縦30cm、幅18cmの厚紙表紙のノートで3冊(各冊100～150ページ)から成るもので、これにクラン(正しくはキワイ語でブアイ buaiという)ごとに氏名を列挙したものである。内容から見ると、1949年7月5～7日の調査で書き上げられた氏名を、以下の年次の調査者がその都度、加筆添削していくもので、氏名・生年・父親名(のちにはこれが姓として固定する場合もある)・備考という各欄のうち、備考欄に、何年何月どこへ転出(または一時他出)、という事項が書き加えられ、調査者(Field Officer)によっては転出・他出の目的まで(たとえば就職・就学・病気入院など)を記入していることもある。転入の場合は、ほとんどが結婚(婚入)であり、村内婚の場合も一方のクランに追加記入される。各氏名の前に通し番号が打たれているので、「何番・誰ぞの妻」という形で参照しやすい。しかしこの通し番号は必ずしも全員に打ってあるわけではなくて、番号のない新規加入者と、番号があって抹消された転出者・死亡者があるので、当初、3冊目の最終番号655というのを全氏名の数と考えて筆写しあげたのが、実際には、この3冊に書かれた氏名の総数は958に上った。(第1表)

第1表 「村帳」記載者数(クラン別)

クラン名	登録番号	登録数	記載実数	うち抹消実数
TEBERE	1～90	90	149	44=105
MARUADI	91～200	110	161	38=123
HEGEREDAI	201～280	80	110	23=87
OROMORUBI	281～345	65	96	22=74
MIARIDAI	346～519	174	238	49=189
GAIDAI	520～655	136	204	57=147
計		655	958	233=725

ところで「村帳」3冊目の末尾にはそれぞれの調査時の集計が記されている。これを整理したものが第2表であるが、実際はこの表の項目以外に、「死亡者」については、1ヵ月未満、1歳未満、1～4歳、5～8歳、9～13歳、13歳以上という6段階に区分してそれぞれの男女別を記録しており、他方、「出生者」数の他に「妊娠中の女性」の数と、「出産可能年齢の女性」の総数とが記され、また「一時他出」人口については「出稼ぎ」(absent from village at work) の他に「潜在労働力」(labour potential) を男女別、10～15歳、16～45歳の2段階で記されているし、「就学」(students) も「公立」(governmental) と「教会立」(mission)との区別があってかなり詳細なものである。しかし各年次の調査官(Inspecting Officer)の主観によって各項目の設定基準が異ると見えて、たとえば1957年には「社会増減」(migration: in, out) が多く、つまり他の年次ならば「一時他出」に数えられる数をこの調査官は厳しく「転出」として抹消しているし、1952、54年の調査官はその前後の年次に比して「一時他出」人口を多く数えているが、現実にパラマ島の人々にある時点での不在者を「ちょっと数日ダルーに(遊びに)行っているだけ」か「しばらくダルーに(働きに)行って帰って来ない」のかの区別を確かめるのは容易なことではないので、正に調査官が主観的にこれを「在村」とするか「一時他出」とするかを決定するしかない。

いずれにしてもこの表の「在籍」人口から「一時他出」人口を差引いた数が「在村」人口となる筈であるが、1949、51、57、63年に関してはその合計が合わない。そして1949年に455人だった在籍人口が1964年には773人に増えており、400人だった在村人口の方は1958年の530人をピークとして以後急減し、結局1964年には269人になっている。

この数値が1978年のセンサスでは在籍751人、在村185人となっており、約 $\frac{1}{4}$ が在村しているにすぎないということになっている。

「徴税票」というのはパラマ本村のものではない。ダルー在住者に課せられた徴税の原票ともいるべきもので、ここに扱うパラマ村民というのは正確にいえば「パラマに本籍を有しダルーに居住する者」のこと、もっと具体的にはダルーの町

第2表 ペラマ村人口統計 (1949~64. Village Register Note, Parama)

年	月	日	調査時	総人口	自然増減			社会増減			一時他出			一世帯均											
					在籍	在村	男 女	出生	男：女	死亡	男：女	転入	男：女	転出	男：女	地区	男：女	外	男：女	就学	男：女				
1949	7.	5-7	*455	400179 : 221												8	6:	2	31	31 :	0	3821 : 17	5.0		
1950	5.	23	394	320144 : 176	26	16 :	10	8	5 :	3	6	3 :	3	1	0 :	1	16	14 :	2	51	51 :	0	7	2 : 5	—
1951	4.	2	*485	380160 : 220	6	4 :	2	5	1 :	4	4	3 :	1	2	0 :	2	28	27 :	1	69	68 :	1	19	8 : 11	4.7
1952	5.	3	621	353161 : 192	15	4 :	11	5	2 :	3	13	6 :	7	4	1 :	3	121	69 :	52	115	71 :	44	32	18 : 14	4.7
1954	8.17-18	639	394158 : 236	53	25 :	28	18	13 :	5	6	6 :	0	7	3 :	4	91	49 :	42	122	101 :	21	32	20 : 12	2.1	
1956	3.	8	648	481182 : 239	30	15 :	15	19	9 :	10	4	1 :	3	10	2 :	8	45	42 :	3	95	93 :	2	27	16 : 11	2.2
1957	4.24-27	*649	467204 : 263	31	13 :	18	9	4 :	5	27	16 :	11	39	23 :	16	53	28 :	25	92	74 :	18	35	25 : 10	2.3	
1958	3.26-27	655	530246 : 284	14	8 :	6	8	4 :	4	6	4 :	2	6	3 :	3	53	28 :	25	37	36 :	1	35	25 : 10	2.3	
1959	5.29	678	494220 : 274	36	17 :	19	8	6 :	2	2	0 :	2	8	4 :	4	89	50 :	39	79	60 :	19	16	14 : 2	—	
1960	3.16	680	464186 : 278	19	9 :	10	13	7 :	6	1	1 :	0	4	2 :	2	68	54 :	14	60	54 :	6	88	52 : 36	—	
1961	6. 1	707	385156 : 229	35	23 :	12	6	5 :	1	6	2 :	4	8	6 :	2	131	91 :	40	65	54 :	11	126	56 : 70	2.6	
1962	4. 2	735	312147 : 165	32	15 :	17	7	2 :	5	8	4 :	4	8	4 :	4	154	74 :	80	148	89 :	59	121	62 : 59	—	
1963	3.19	*772	413179 : 234	32	19 :	13	3	2 :	1	18	10 :	8	4	0 :	4	133	81 :	52	105	64 :	41	111	64 : 47	—	
1964	6. 2	773	269118 : 151	18	9 :	9	9	5 :	4	6	3 :	3	14	4 :	10	169	96 :	73	241	131 :	110	94	54 : 40	—	

\*印 合計が合わない

域にある第1～第3パラマ・コナに住む人々のことである。世帯単位で記載されているがその1966年のものは実数95世帯、354人、これも記載後の抹消（つまり、徴税時にはダルーを立去っていたもの）が多く、36世帯、92人が赤インクの線を引いて消されており、結局、59世帯、262人が徴税の対象になっている。コナというのはダルーの整備された市街化区域の西北側と、一部は飛行場の南に雑然と出身地別の集団をなして住みついたもので、それぞれ母村の村名をそのままに、カタタイ・コナ、マバドゥアン(Mabaduan)・コナ、セペ(Sepe)・コナというような呼び方をしている。これらのコナの発生は1950年前後に始まると思われるが、その中でパラマ・コナは1940年代後半には発足していたと考えられ、現在、第1～第3という3区画のコナを持っているのはパラマ・コナだけである。パプア南部の沿岸集落からダルーに出て来る人々は、もちろんここで就業の機会を得ようとするものであるが、逆に、ダルーのこれらコナに在住できる条件として、公務をはじめとしてその他の職業を有する者を優先した。ここでいう公務には、巡査・看守（女看守もいる）・警備員・運転手・清掃夫等があるが、パラマ・コナについていえば、船員（政府の船や民間の船）が多いのが一つの特色であり、その他、白人の商会（もとはパラマ島で捕獲したワニの皮をヨーロッパに売っていた）に勤める者、さらにその白人の家庭への通い女中をする者など、他のコナとはすこし趣を異にしていた。

「徴税票」ではこのように世帯主または家族の就業状況が明らかになるが、もちろんこれはパラマ本村の就業構造ではない。そして、先の「村帳」との間のいちばん大きな相違はこれはクラン別の記載になっていないことで、パラマ本村の場合、どちらの端から戸口調査を始めたとしても順番に各戸を書いたらそれが自然にクラン別・クラン順になったのに比して、パラマ・コナでは、そのようにクランごとに調べることの方が困難だからであろう。そしてこれは後述するが、都市生活の中ではクランを単位とする生活の必然性は全くないため、各戸・各世帯がどのクランに属するかという記載も必要がないわけである。

1978年の「センサス個票」は、パラマ本村で調べたもので、在籍人口の動向を

探る材料ともなる。「個票」が「現況調査 (Village Survey) 個票」といわれる所以であるが、これもクラン名の記載はない。各シートにそれぞれ32人の記名欄があるが、これをほぼ1世帯1シートの割合で記入して115枚に121世帯、751人が登録されている。各シートの筆頭者がいわば戸籍筆頭者で、01という番号のところに記名され、その妻が02のところにあって「関係」という欄にW-01、つまり01の妻と表示される。以下、たとえば男の子はS-01、つまり01の息子、女の子はD-01、つまり01の娘、息子の嫁はたとえばW-04、というように、W、S、Dの記号で、書いていく。「職業」欄は、0. 子供、1. 無職、2. 政府事業、3. 私企業、4. 自営、5. ミッション、「現金収入」欄は、0. 自給作物 (Subsistence), 1. コーヒー、2. コプラ、3. ココア、4. 家畜、5. 茶、6. 香料、7. ゴム、8. 村内加工業、9. その他、の10項目、「教育」欄は0. 未就学、1. 小学校(Primary), 2. 中学校(Secondary), 3. 高等学校(Tertiary), 4. 職業学校(Vocational), 5. 小卒、6. 中卒、7. 高卒、8. 職業学校卒、9. 学歴なし、の10段階、をそれぞれ番号で記入し、最後に「在村」か「不在」か、「不在」の場合、調査時点での居所を明記している。これらの記入はすべて1人の調査官が全村全員について書いている。

この「不在者 (Absent)」の「居所 (Place Name)」を数えると、ダルーに305人が出ているのを最高として、以下、ポート・モレスビー (Port Moresby) 148、トレス海峡 (この調査では各島名は記されていない) 74、の3カ所が圧倒的に多く、以下はキウンガ (Kiunga) 13、ゴロカ (Goroka) 11、ラエ (Lae) 3、キンペ (Kimbe) 3、メンディ (Mendi) 3、ケレマ (Kerema) 2、マウント・ハーゲン (Mt. Hagen)、ラバウル (Rabaul)、アロタウ (Alotau)、ケアンズ (Cairns)、各1で、不在者合計566人となって在村185人のちょうど3倍に当たる。あるいは、おおまかな言い方をすれば、在村：ダルー居住 (主としてパラマ・コナ)：その他、の比が1：2：1であるといえよう。これは「村帳」の最終年度を「徴税票」によって修正した1966年度の数値 (第3表) と比べると、在村が373人、不在者合計352人で、在村：ダルー：その他が2：1：1だったのだから大きく変化している

第3表 クラン別他出人口（1966年現在）

ラン	在籍	日本	ダル(コナ)	マバドウツ	カレロタ	スオタ	ビセマ	ケレマ	ギロタ	ギダ	レモ	ラバ	木曜	ヨク	ヤク	ダム	ケ
	籍	村	ア	ア	ア	ア	マ	レコ	ゴダ	クダ	トス	ア	ベ	ク	ム	リ	ン
TEBERE	105	44	30	6	3	3	2			2	1	2	1	10	1		
MARUADAI	123	73	34	4				1	4	2	3	1	1	1	1		2
HEGEREDAI	87	35	25			1	1		1	3		11		4	5	1	
OROMORUBI	74	38	17	1		6		1		1		7			3		
MIARIDAI	189	114	43			6	3			6		13	1			3	
GAIDAI	147	69	53	2	1	3	2	2		4	1	2	7			1	
計	725	373	202	6	7	1	12	11	8	1	1	5	2	15	1	2	5

ことがわかる。そして12年間に不在人口（一時他出人口）がこのように増加したのに、移動先の方では、1966年にはダルー以外で23の地名が挙がったのが、1978年では半分の12カ所に絞られたこと（もっとも前者では木曜島・ヨーク島・ヤム島・ダーンリィ島の4カ所の地名だったものが、後者ではトレス海峡として一本化されたから、実質的には20カ所の地名が12カ所になったことになる）、1966年には42人だったポート・モレスビーが1978年には148人に、また31人だったトレス海峡が74人に増加したのをはじめ、ゴロカ、ラエ、メンディ、マウント・ハーゲン、アロタウといった遠隔地の地名がふえたのに反して、地区内、つまり対岸のキワイ地区、あるいは西部州内への移動はキウンガを例外として全く姿を消したのは、「一時他出」の概念規定の変化を考慮したとしても著しい変化であることは否めない。因みに、1978年の「個票」の中で「転入（M/Iと表示）」6件がスイ（Sui）2、とツレツレ（Tureture）、カタタイ、オロモサボ（Oromosapo）、イアサ（Iasa）の各1、「転出（M/O）」10件が、ポート・モレスビー、ツレツレ、マバドゥアン各2、ダルー、ラエ、ケレマ、クペレ（Kupere）各1となっていることを付記しておく。

なお、1979年9月現在では、パラマ本村に27戸、190人が在村し、ダルーの三つのパラマ・コナに計27戸、194人が在住するのは、偶然の数の近似であるが、それ以外に約350人が出ていて $1:1:2$ の比率となって、「その他」が急増している。

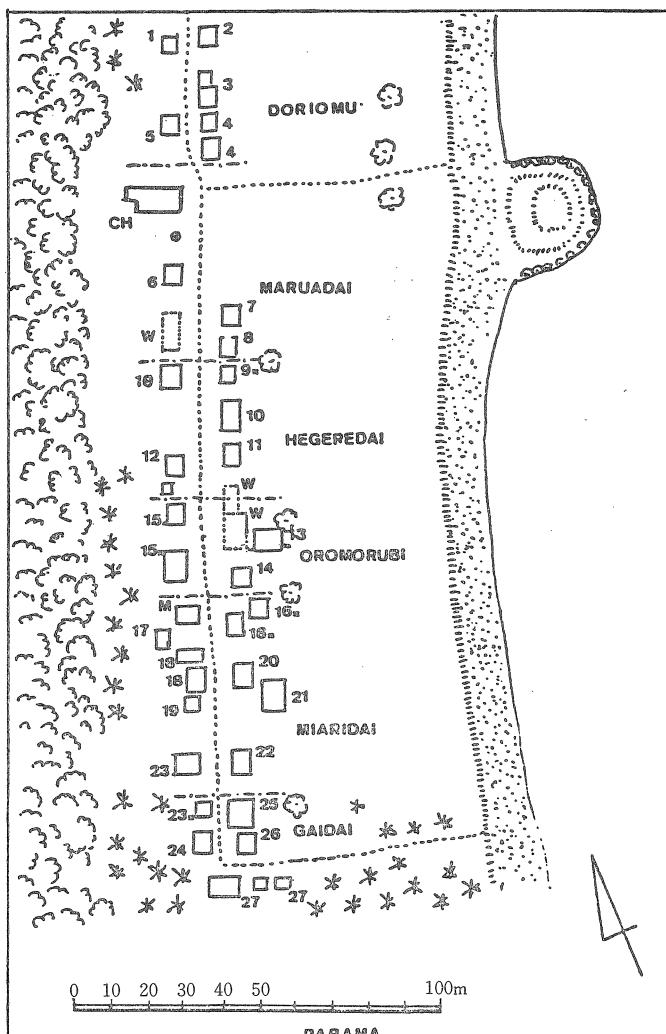
勘定になる。

これらの調査年次の間に 1975 年 9 月 16 日のパプア・ニューギニア共和国独立があることを忘れてはならない。新しい国都の建設と、それ以外にも中心性をもつ都市の充実が、顕著な人口吸引をもたらしていることはいうまでもない。ダルーという地方都市を介して地方村落の潜在労働力が掘り起こされていく状況は、世界中のどの国にも見られる近代化の過程での問題である。

### III 人口動態と文化の構造

さて、これまでパラマ島の人口を統計資料によって量的に分析することを試みた。しかし、ここで注意しなければならないことは、パラマ島にある本村から何人がダルーのパラマ・コナに出たか、そしてさらに何人がポート・モレスビーやトレス海峡に移ったかということで留まったのでは人口動態の本質を見落としていることになるという事実である。

先に結論的な表現をするならば、パラマ本村でクランごとの「住み分け(segregation)」をしていた人たちが、ダルーのパラマ・コナでは村単位の「住み分け」となり、そこからポート・モレスビーに出ると、いわゆるワン・トク (wan tok, つまり one talk のピジン化、同じ言語を話す仲間ということで、いわばキワイ地区のキワイ語の人々という単位) ごとの「住み分け」ということになる。パラマ本村については「村帳」記載の順序どおりに、北からドリオム（ただし「村帳」ではテベレ Tebere となっていたが全くの同義語）5 戸、マルアダイ 3 戸、ヘゲレダイ 4 戸、オロモルビ 3 戸、ミアリダイ 8 戸、ガイダイ 4 戸と並んでいる（第 3 図）。ただ、厳密にいようとマルアダイの土地の一部を教会（図中の CH）に提供したため、家屋番号 9, 15 がそれぞれヘゲレダイ、オロモルビの土地内に家を持ったのと、診療所（図中の M）がミアリダイの土地に建てられたのでその管理に当たる者が本来のガイダイから家屋番号 16 として診療所の前に住み、その見返りとしてミアリダイの家屋番号 23 の別棟がガイダイの土地に建っているが、この 4 戸は理由



第3図 パラマ村家屋配置図

CH=教会 M=診療所 W=ウェルカム・ハウス

のある例外といえよう。また、図中にWで表示したのは、ウェルカム・ハウス(Welcome House)という来客用の仮住居で、ちょうど筆者らが訪問した1979年9月1～2日に行われた教会改築8周年の記念行事に帰島して来た人たちのために臨時に建てられたものであって、マルアダイ、ヘグレダイ、オロモルビに各1戸用意されたが、他のドリオム、ミアリダイ、ガイダイでは、その中の比較的大きい家（たとえば家屋番号21, 27）とか、別棟のある家（家屋番号4, 16, 23）等に来客を泊めていた。また、各クランごとに公用のトイレも設置しており、筆者らはガイダイの客として家屋番号27に宿泊（大人・子供合わせて約20人の来客が同宿）し、家屋番号24と27の間に設けられたトイレを使用するようにいわれた。教会や診療所の敷地、ウェルカム・ハウスの場所は、それぞれ不在で久しく空家になっていたものを取り壊した跡であるらしく、他のクランの土地に家を持つ家屋番号9, 15, 16, 23の各世帯は、いったんダルーその他の都市に出ていて本村の家を失った者が、帰村して再び家を持つに至った例であることも興味深い。ペラマ本村から島内のガジロ、対岸のゲアヴィ、フボトゥリ(Huboturi)といった「出作り」の仮小屋に行くのは、家族またはクラン単位である。ペラマ島内は通過不可能なマングローブ林に覆われているので、同一島内でも外廻わりにカヌーで行くしかない。年間を通じて南岸には東南からの強風が吹きつけることが多いので、コースは本村からいったん北に出て、トロ水道を抜けるのが普通である。そうなると、この3カ所の中で実際には対岸のゲアヴィがいちばん近く、島内のガジロへ行くのが最も遠いことになる。ゲアヴィはその北のスイの分村もあるし、フボトゥリはカタタイがその西に移動する前の村もあるが、そのスイ、カタタイの両村へもクラン単位でカヌーでその日のうちに日帰りで往復できる生活圏にあり、当然、交易・通婚の頻度も高い。カタタイのさらに西方、カダワ(Kadawa), ドロゴリ(Dorogori), そして州都ダルーまで、カヌーで日帰り往復をしようとすればできないことはないが沿岸を流れる潮汐流を見て、いい汐どきを選ばねばならないから、実際問題としてはこれらのところへは日帰りの舟行はしない。そしておもしろいことに、カダワ以遠への舟行にはクラン構成員以外が便乗

することもあって、とくにダルーへの往復は、いわば誰でも乗るという乗合い舟になる。ここでクラン単位の移動という原則は崩れはじめる。

しかし、そのような日常的流動とは別に、長期的な滞在を伴う移動の場合は再び家族・クラン単位となる。南へ80kmのヨーク島へはテベレ・クランが中心で移動したのに対し、南々東70kmのダーンリィ島へはミアリダイ・クランが、そしてトレス海峡の中心地、サーズデイ島(Thursday Is.)へはヘグレダイ・クランが主流をなした。これはサイバイ島(Saibai Is.)からケープ・ヨーク(Cape York)半島へ同一クラン7家族を引具して移動したBamaga一族の例(これがバマガ植民地という公式名称を生むことになる)と共に通しており、この付近の人々の移動の原則となっている。なおこの型の移動の場合も交通手段はやや大型のカヌーか、せいぜい船外機をつけたディンギーによるのである。また、1952年以来、ヨーク島に定住して、オーストラリアの市民権を得ている3家系(Nawia家、Kabay家、Gamia家)では、移住後に生まれた子供を除いて全員がパラマの側でも依然として在籍のままの「一時他出」として扱われていることが判った。これらの家を通じて年に数回、パラマのクラン仲間がドラム、マットやバナナの苗等を運んで、ヨーク島で衣料品その他と交易している。

さて、ダルーに移動した人たちについては、コナのことを先にも述べた。パラマの三つのコナの発足は1940年代後半から50年代の間であるが、戸数は現実には第1コナ7戸、第2コナ8戸、第3コナ12戸の合計27戸しかない。ここに入れ代り立ち代りパラマ島出身者が住むわけで、ほんの1~2日の滞在を除いて一応の定着をした者が「徴税票」に登録されたり、「村帳」や「センサス個票」の備考欄に注記されたりする。それは1966年で61世帯235人、1971年で60世帯355人、そして1977年に数えたときでも59世帯262人に上るから、単純計算しても1戸に2~3世帯12~13人が住むことになる。27戸のうち21戸については、1966年からの歴代居住者(登録者)名を明らかにすることができたが、その氏名を「村帳」のクラン別記載と対照しながら確認すると、同一クランだけで専有占居したのは3戸だけで、大部分は二つのクランの共有、うち4戸は三つのクランの同居が認められた。時

期によっては1戸に7世帯32人とか、6世帯27人という数が登録されたのだから、クランの混住はやむを得ない。これらは姻戚関係を辿って子供を寄留・通学させるとか、病人を通院させるケース、公務員の職を得た者が住居の方も前任者のあとにそのまま入居するケース等、さまざまである。最低条件としてのパラマ村民のパラマ・コナ居住さえ、人口と戸数の関係でそれが不可能となって、他のコナに住む例も出て来る。また、コナ居住者の流動性も激しく、1966年にパラマ・コナに居た61世帯のうち、1977年9月にそのまま元のコナに居住しているのは半数たらずの29世帯だけ、2世帯が他のコナへ、4世帯が本村へ帰島したのを除くと、ポート・モレスビーへ7世帯、ヨーク島へ5世帯、ダーンリィ島へ1世帯とか、キウンガ、オリオモ(Oriomo)、レーク・マリー(Lake Murray)といった奥地へミッション関係の仕事で移ったもの、国内第2の都市ラエや、隣州のキコリ(Kikori)へ移ったもの等、多様な流動をしている。つまりダルーのコナは、ダルーでの就業をステップとして、さらに二次的に他の就業地へ移る人たち、都市部や開拓地への労働予備軍の待機の場所である。

注意すべきことは、ダルーからの再移動にはもはやカヌーやディンギーは使われないということである。ダルーはポート・モレスビーからのエア・ニウギニ(Air Niugini)が就航(1979年現在、週4便)しているほか、レーク・マリー、キウンガ、モアヘッド(Morehead)等の奥地、ケレマ、キコリ等の隣州の町へ飛ぶローカル線、タル・エアー(Tal Air)の路線があるが、これらの航空機はもちろん予約して席を取らなければ利用できないから、必然的に、個人単位の移動が多くなる。つまり新しい職を求めてポート・モレスビーに行くのも、政府やミッションの使命を帯びて奥地のワニ養殖やプランテーションの実務に赴くのも、選ばれた個人がまず出かけ、のちに便を得て家族を呼びよせることもあるが、多くの場合、世帯単位ということは崩れざるを得ない。

他方、パラマ島民の優位性が認められて、船員(crew)・機関員(engineer)として船に乗組む者が多いが、これはダルーの埠頭とか地方市場の付近にたむろして待って、そこに着いたオーストラリアのエビ・トロール船の船主や船長に直接

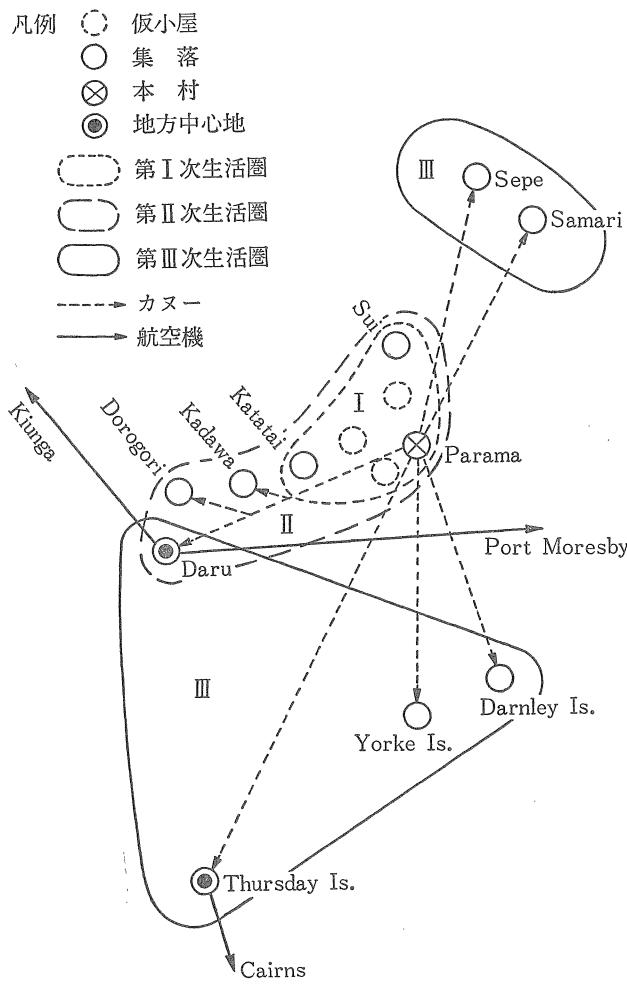
採用を申出るという形がいまでも行われており、筆者もそのような船主と思われて「私は航海歴どれだけ、英語もできます。船員として採用してください」と名乗り出されたことがある。もちろん、船員の場合は単身で採用されるが、それがさらにサーズデイ島で他の職業に転業したりすることもある。

これらの例を図式化したものが第4図である。パラマ本村から「出作り」の農業や漁撈をするために仮小屋へ、日帰りの交易をするために隣村へという第Ⅰ次生活圏、往復に1日以上の滞在を伴うという第Ⅱ次生活圏までは、カヌーを利用しての家族・クラン単位で行動するが、どちらかというと第Ⅱ次圏への往復ではクラン構成員以外の便乗組も現れる。長期滞在を意図して移動するのが第Ⅲ次生活圏であるが、これは一次的就業地と呼ぶこともできる。この場合、交通手段としてのカヌーはやや大型化するのに、行動の単位はクラン内に収縮する。しかし移動先では、元のパラマ島でのクランは通用しないので、結果的にはパラマ島出身者という意識が表面化する。そして、これがダルーやサーズデイ島のような都市居住となると、そこを媒介点として二次的就業地を見出す可能性が多い。これは母村のパラマとの関連ではもう生活圏の外であるといつていい。つまり、航空機を利用して移動するというのはもうパラマ島民の本来の生活から切り離されることになる。そして構造も圈構造ではなくなって、むしろ矢印で圏外に去った形に表現しよう。

このように、パラマ島のささやかな可住地にきっちりクラン別の「住み分け」をしていた人々が、首都ポート・モレスビーや、オーストラリア側のケアンズで都市労働者となつたとき、それはもう何クランの誰それではなくて、単に、何人が労働力として都市へ流出したという数の問題になつてゐることに気づくであろう。近代化の波はこのような形で、島の人々を外部へ吸引しながら変質させるのである。

### おわりに

この小論を書きながら、筆者らをパラマ島に案内してくれたパラマ・コナの住



第4図 パラマ島民の生活圏模式図

人、Asa Dawita (英語流に Arthur David という) 氏の大柄な赤ら顔が目に浮ぶ。その旅の世話をてきぱきやってくれ、同じカヌーでパラマ島に往復した若い婦人警官 Tali Amani さんの綺麗な英語が耳に残る。そしてパラマの村を、これが誰の家、この主人は誰、と一々指さしながら、もの珍しそうに筆者のノートを覗きこんでいた村の中学生たちの好奇心に富んだ澄んだ瞳が忘れられないし、徹夜の踊りの合い間、ずっと筆者らの横にいていまの踊りはこんな意味と解説をしてくれた村の人たちの親切さを思い出す。こうした人々の善意と友好とに支えられて効率的な調査ができたことを心から感謝しながら筆をおくことにする。

〔本論文は1977、79年文部省海外研補助による調査の報告の一部で、1981年11月15日、関西学院大学で行われた地理学合同大会に「パプア南岸ペラマ島の文化変容」と題して発表したものである〕

#### 参 考 文 献

- ARCHBOLD, Richard & RAND, A. L. (1979) : *New Guinea Expedition, Fly River Area, 1936-1937*, Robert M. McBride and Company, New York
- CHALMERS, James (1903) : Notes on the Natives of Kiwai Island, Fly River, British New Guinea, *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 33, pp. 117-124.
- 橋本征治 (1979) : トレス海峡諸島における文化変容の空間的側面, 人文地理, 31-4, pp. 289-306.
- HOWLETT, Diana (1973) : *Papua New Guinea, Geography and Change*, Nelson, Sydney
- JACKSON, Richard, ed. (1976) : *An Introduction to the Urban Geography of Papua New Guinea*, Univ. of Papua New Guinea, Port Moresby
- LOCKLEY, G. Lindsay (1972) : *From Darkness to Light, The London Missionary Society in Papua, 1872-1972*, The United Church in Papua New Guinea and the Solomon Islands, Port Moresby
- 松本博之 (1980) : パプア南西岸地帯における地域社会の諸相——マワタ Mawata 村を中心として——, 愛媛大学教養部紀要, 13, pp. 133-183.
- MCFARLANE, Samuel (1888) : *Among the Cannibals of New Guinea*, London Missionary Society, London.

- MOORE, R. & MACFARLANE, J. W. (1976) : *Fisheries Research in Northern Torres Strait by the Papua New Guinea Government*, A background paper prepared for the Northern Fisheries Committee Meeting, Brisbane.
- 大島襄二 (1978) : トレス海峡諸島の文化変容とその歴的展開, オーストラリア研究紀要, 4, pp. 185-207.
- WURM, S. A. (1975) : Papuan Languages and the New Guinea Linguistic Scene, *New Guinea Area Languages and Language Study*, 1. pp. 323-348.

——文学部教授——